

嘉徳海岸 2017年6月11日 海の生き物を守る会砂浜生物調査報告

海の生き物を守る会では、6月11日に嘉徳海岸において、砂浜海岸生物調査を一般の市民を含めて、実施した。参加者は20名であった。その結果を以下に示す。

砂浜の回復について

2015年5月に、われわれが行った嘉徳海岸の視察および生物調査では、砂浜の消失が起こり、写真1のようにタコノキ（アダン）を中心とした海浜植物帯の上部まで砂が無くなり、アダン林も一部が浸食されていた（写真2）。この原因は詳細は不明であるが、要因の一つは、嘉徳湾口付近の青戸沖における海砂の採取が考えられていた。地元の住民の話では、この砂浜の消失は、数年前から急激に起こり、とくに2014年の台風によって砂浜の浸食が進み、集落の一部、とくに集落の墓地が浸食され崩壊する危険が指摘されていた。こ

この砂浜の浸食は、写真3の10年以上前に撮影された写真と比べれば、明らかである。



写真1 2015年5月の嘉徳海岸

写真2 崩落しつつある上部海浜植物帯のアダン林（2015年5月）





写真 3 10 年以上前に撮影された嘉徳海岸の砂浜

今回 2017 年 6 月の観察では、砂浜がかなりの程度回復していることが明らかになった（写真 4）。



写真 4 回復した嘉徳海岸の砂浜 グンバイヒルガオの群落が新しく砂浜に形成されつつある



砂浜の回復の様子は、写真2や3と比較すれば歴然としている。このことから、数年前

写真5 写真2と同じ場所の2017年6月の様子

に砂浜が消失し、浸食が進んだように見えたのは、一時的な現象であったのかもしれない。その原因を十分科学的に明らかにすることが求められるだろう。もし、一時的な現象であれば、砂浜の浸食は、砂の供給と消失のバランスの一時的なゆらぎと見ることができる。もし、この揺らぎがもう少し長期に見ると消失の方向にあるならば、根本的な対応が求められるだろう。原因の究明が必要である。

生きもの調査の結果

砂浜に生息・生育している動植物の調査を行い、同時に漂着した動物の遺骸についても調査した。

貝類

貝類については、一部生息しているものを含め、漂着している殻を中心に調査を行った。その結果、60種以上が見いだされ、そのうちレッドデータ種6種が発見された。ナガタママキ（絶滅危惧Ⅰ類）、ホシヤマナミノコザラ、トウカイトママキ（絶滅危惧Ⅱ類）、タイワンキサゴ、ナミノコガイ、キュウシュウナミノコ（準絶滅危惧）の6種の絶滅のおそれのある貝類が確認された（括弧内は環境省レッドリストの評価）。これらは細砂の砂浜・浅海底に生息する種で、いずれの種も琉球列島での生息地はごく少ない。ナミノコガイは、古い殻しか確認されず、現在は生息していないと思われるが、今後精査が必要である。

海浜植物

今回の調査では、嘉徳海岸の海浜植物帯には、アダンの海岸林が形成されており、その下部および前面には、グンバイヒルガオ、ハマゴウ、コマツヨイグサ、クロイワザサ、ハマアカザ、ハマユウ、シロバナセンダングサ、キダチハマグルマが生育している。とくに、今回注目すべきは、回復した砂の斜面でグンバイヒルガオが定着し、砂の固定や流出を食い止める機能を果たしつつあることで、少なくとも数ヶ月以上砂が安定していることを示している。海浜植物の種数は必ずしも多くないが、これら海浜植物は、拡大した根系を持ち、砂の動きを止め、固定する機能を有し、海浜植物の存在は砂丘・砂浜の存在を維持・保証するものであり、嘉徳海岸のように人工物のない自然海岸では、その機能が十分に期待できる。そもそも嘉徳の集落は、河川が運んで作られた海岸の砂州上に形成されており、集落の全体に海浜植物帯があったと推定される。集落の発達と共に、海浜植物は現在の集落と海岸の接点に残存しているが、とくにアダン林の健全な発達は、浸食に対する防災機能もあり重要である。

その他

今回は発見することができなかったが、嘉徳海岸にはオカヤドカリ類や陸貝類がアダン林の中に多数生息していることが明らかになっており、その詳しい調査が必要である。また、奄美大島生物多様性地域戦略によると、嘉徳川河口干潟には、カワニナ類を始め希少な貝類や、日本固有種で希少なカワスナガニの生息が知られており、今後の詳しい調査が必要である。